米澤元健展

～まちづくりに尽くした人生～

米澤元健（もとたけ）は、分県運動の立役者として知られる米澤紋三郎（もんざぶろう）・とも夫妻の長男として、明治 15 年(1882)に生まれました。米澤家は、地方の名家であり、代々その当主は政治、経済、文化等、各方面で活躍していますが、元健もまた、米澤家の名にふさわしく幅広い分野で活躍しています。

明治時代末にはすでに現代のような青少年育成事業に目を向け、私財を投じて様々な形で積極的に事業の推進を図ったほか、入善町長（旧入善町、新入善町）や町議会議員、県議会議員等も歴任しています。

今回の展示では、米澤元健の生涯にスポットをあてると共に、明治から昭和期の入善町の歴史についても史資料から考察したいと思います。

テーマ	資料名	和暦
殊勲	勲五等双光旭日章勲記	昭和 39 年 4 月 29 日
	勲五等双光旭日章	昭和 39 年 4 月 29 日
米澤元健の人となり ～政治家として、事業家として～	元健写真	明治 20 ヵ
	米澤元健氏ノ略歴ト事業	大正 2 年 9 月
	衆議院議員候補 米澤元健推薦文	大正 13 年 4 月
	履歴書	昭和 19 年
	小学校教員免許状	明治 40 年 9 月 10 日
	進達願	明治 29 年 3 月
	証（入善倉庫供託書）	明治 42 年 12 月 19 日
	小川温泉㈱取締役当選通知書	大正 5 年 6 月 25 日
	入善運送合名会社定款	昭和 2 年 1 月 1 日
元健長年の夢 ～私立米澤図書館～	図書台帳　其二	明治 34 年 ～昭和 8 年
	米澤図書館印	明治 43 年 11 月
	米澤図書館長印	明治 43 年 11 月
	会計簿	明治 44 年 2 月 7 日
	財団法人私立米澤図書館一覧	大正 2 年 5 月 31 日

テーマ	資料名	和暦
元健長年の夢 ～私立米澤図書館～	雑誌名印等	大正～昭和
	私立米澤図書館正面	明治～昭和
	私立米澤図書館書架	明治～昭和
	私立米澤図書館男子閲覧室	明治～昭和
	私立米澤図書館女子閲覧室	明治～昭和
地域の発展のために～元健の大事業～	花月公園（写真）	
	謝状	明治 43 年 9 月 23 日
	忠魂碑銅像の台石工事契約証及び設計書	明治 44 年 4 月 24 日 ～7 月 8 日
	忠魂碑除幕式	明治 44 年 8 月
	領収証書	明治 44 年 7 月 21 日
	入善局特設電話番号表	明治 44 ヵ
	入善駅東側通路の新設前	大正
	入善駅開始 10 周年入善舟見間通路竣工記念祝賀会	大正 8 年 4 月 16 日
涙で勝ち取った誘致 ～富山県立入善農学校～	郡立農学校県移管内定の件等回章	大正 10 年 11 月 11 日
	感謝状	大正 11 年 6 月 10 日
	富山県立入善農学校絵葉書	大正 12 年 3 月
	米澤元健銅像建立	昭和 11 年 11 月 1 日

殊勲

旭日章は、明治８年(1875)に我が国最初の勲章として制定されました。勲章のデザインは、日章を中心に光線(旭光)を配し、紐には桐の花葉を用いています。

この勲章は、特に国家または公共に対し功労のあった人物へ授与するものです。

元健も長年の公共活動の功労が認められ、昭和 39 年(1964)4 月 29 日に勲五等旭日双光章を拝受しています。

米澤元健の人となり～政治家として、事業家として～

米澤元健は、明治 15 年(1882)5 月 24 日、米澤紋三郎・とも夫妻の長男としてこの世に生をうけました。

米澤家は地方の名家であり、代々その当主は政治、経済、文化等、各方面で活躍しています。元健の父、紋三郎も富山県を石川県から分離独立するための分県運動で活躍した人物であり、様々な方面で地域の発展のために尽力した人物でした。

元健も、米澤家の名にふさわしく幅広い分野で活躍しています。特に、米相場に失敗し、多額の借金をかかえた父紋三郎にかわり元健が米澤家の当主となった明治 38 年(1905・元健 23 歳)からの活躍は、顕著です。

元健は、明治時代末にはすでに現代のような青少年育成事業に目を向け、私財を投じて様々な形で積極的に事業の推進を図りました。中でも特筆すべき事柄として、女性の自立を支援するための教育的事業を推進していたことが挙げられます。大正期に入ると職業婦人が台頭してきますが、元健は時勢を見極める先見の明をもった人物だったということが、このことから分かります。

また、入善倉庫株式会社取締役、入善銀行株式会社取締役等を務める一方、入善町長（旧入善町、新入善町）や町議会議員、県議会議員等も歴任しています。

事業家、政治家など様々な顔を持ち合わせて活躍した元健は、昭和 39 年(1964)、その功績が認められ勲五等双光旭日章を賜り、翌 40 年(1965)、83 歳の生涯を閉じました。

元健の娘ハギ氏は、紋三郎・元健の思い出として、「祖父・紋三郎は大変穏やかな人で、怒った顔を見た記憶はありません。父（元健）がワンマンでいつも大きな声を出していたのと対照的でした。」と語っておるぞ。

『越中の群像 富山県百年の軌跡』（富山新聞社編、昭和 59 年、桂書房、）より

元健長年の夢～私立米澤図書館～

財団法人私立米澤図書館は、明治 43 年(1910)に当時町長であった米澤元健が、地方教育の振興と地域文化の発展を目指して、私財約１万円を投じて造ったものです。当時の１万円を国家公務員の初任給で比較・換算すると、現在の価値でおよそ 3400 万円弱に当たります。[1] 設立当時の蔵書数は約 6,000 冊で、富山市立図書館、高岡市立図書館とならんで県内三大図書館と称せられていました。

元健は富山県立尋常中学校に在学中の少年時代から、図書館建設の夢を温めており、学友にもその実行を約束していましたが、ついに明治 44 年(1911)2 月 7 日、長年の夢であった私立米澤図書館を完成させ、一般公開を始めました。自らが館長を務め、巡回文庫の設置、講演会や研修会の開催など精力的に事業を行いました。

さらに大正 9 年(1920)10 月には娯楽施設の必要性を感じ、社交倶楽部用の建物として端正館を建設し、財団法人私立米澤図書館に寄附しました。館内は和洋の設備が施され、洋室にはビリヤードの台が据えられるなど充実した施設でした。

しかし、昭和 7 年(1932)入善銀行の破産により、銀行の株配当金と寄付金による経営が成り立たなくなり、昭和 8 年(1933)に休館、昭和 12 年(1937)に閉館しました。

長年に渡って、多大の労力と私財を惜しまず提供したその姿は、まさに入善町における教育文化の父、生涯学習の父と呼んでも過言ではないのじゃ。

地域の発展のために～元健の大事業～

米澤元健は、明治 43 年（1910）7 月入善町長の職に就いて以来、6 期 15 年の間務め、次の事業を始めとして、入善町に多大の貢献をしています。

(1)花月公園の新設(明治43年7月)

明治43年(1910)4月に着工し、同年7月に竣工した花月公園は、元健が自己の邸宅地3,000坪の約半分を提供して新造したものです。花月公園という名前は、元健が崇拝していた江戸時代の政治家、松平定信の著作「花月草紙」に因んだものです。

---

[1] **明治 44 年**：高等文官の月給 55 円（参考：『続・値段の明治大正昭和風俗史』週刊朝日編、朝日新聞社、昭和 56 年）
平成 31 年：国家公務員総合職（大卒）の月給 186, 700 円（参考：人事院ＨＰより）

(2)忠魂碑の建立(明治44年8月16日)

忠魂碑とは、国や公共のために忠義を尽くして亡くなった人の霊を祀るものですが、元健は、入善町の日露戦役戦病死軍人十数名の鎮魂を旨として、明治44年(1911)に忠魂碑を建立しました。工費は約2,500円で、その内約1,500円が一般町民からの寄附、約1,000円が元健の寄附によるものでした。忠魂碑は、現在も入善神社の境内に残っています。

(3)入善駅東路の新設(明治44年10月)

明治期、北陸線は富山と直江津が結ばれておらず、富直線建設が大きな課題でした。米澤紋三郎や田村惟昌ら国会議員の努力により富直線建設が決定され、着工の運びとなったのは、明治40年(1907)のことでした。その後、明治43年(1910)には、魚津泊間の鉄道が開通し、入善駅が開駅しました。しかし、富直鉄道開設当時、駅東側には馬車が通れるような道がなく、町民は不自由していました。そこで元健は、明治44年(1911)10月、敷地116坪を寄附して入善駅東路を新設しました。

(4)特設電話の架設(明治44年11月)

明治44年(1911)11月１日に、入善に初めての電話が開通しました。当時、電話を設置するためには最低でも10件の加入が必要でした。元健はこの設置のため、加入者の勧誘に東奔西走し、無利息で加入金の貸付をし、自らも自宅ならびに図書館の二口分加入をするなど、特設電話の開通事業に心血を注ぎました。

(5)入善神社の移転新築(明治45年4月)

入善神社の鎮座した従来の地入膳北町は、雨水の排水が悪く、その上、社殿後方に入善駅停車場がありその騒音を避けるため、米澤元健は有志に諮り、移転新築を企てました。元健の私有地東寺田（1,800 坪）と従前の社地（600 坪）を交換し、新たに社地としました。氏子の寄付金を募り、明治 43 年(1910)本殿並びに中門の新築に着手し、明治 45 年(1912)4 月に竣工しました。

この事業の他にも入善区域農産物品評会の開催（明治43年(1910)）、呉羽紡績の誘致（昭和10年(1935)）などに力を注ぎ、また青年団などの育成、指導にも貢献しています。

元健は、事業の推進にあたって私費を投じ、私有地を提供し、また自ら町内を奔走し、町民を説得してまわった。入善町の発展のために誠心誠意尽力している姿が、資料から伺えるのじゃ！

涙で勝ち取った誘致～富山県立入善農学校～

明治 42 年(1909)４月、皇太子殿下（大正天皇）の北陸行啓の記念事業として、三日市町（現黒部市）に、三学級編成乙種の下新川郡立農業学校が設立、その分校として大正８年(1919)４月、下新川郡椚山村小杉（現入善町小杉）に小杉分校の設置が認められました。

大正 10 年(1921)４月、「郡制廃止法」が公布され、これを機に本校と小杉分校との帰属が問題となり、県当局はいずれか１校を県立とする意向を伝えてきます。

当時、入善町長であった米澤元健は、小杉分校を独立させ県立農学校にしたいと、地域の総力を結集した運動をし、自らの政治生命を賭けました。その結果、大正 11 年(1922)１月、富山県参事会において、県立入善農学校設立が可決されるに至ります。早速、元健は入善町議会において、県立農学校の校舎や設備充実のため、教育費予算の増額を決議します。そして、大正 11 年(1922)４月、米澤図書館を仮校舎として開校し、翌 12 年(1923)３月 29 日には、校舎新築落成式が挙行されました。

さて、その時のエピソードを元健は晩年、次のように語っています。[2]

黒東地区への県立学校設置を強く主張

…もともと農業学校は、三日市にあったものだから、県立に移管されるには当然そのまま昇格するのが建前だったのだろうし、当時郡長だった桑島虎次郎氏と県内務部長の浅利三郎氏とが前もって打合せ、三日市に置いたままで昇格させる計画だったのです。私はいち早くこれを察知したものだから、さっそく当時の東園知事に「下新川は大郡で黒部川をはさんで東西両区域に分かれているが、県立の学校を全部黒部川以西に置くのは不合理だ。黒東にも同様の恩典あってしかるべきだ」と強く主張した。

危機的状況！知事へ涙の説得

…しかし、三日市側も郡長、内務部長、それに私の政敵だった森丘正唯氏がいて、なかなか承知しない。情勢はきわめて悪かった。はじめ私の主張に賛意を表していた知事も、しまいには「やるとはっきり言ったのではない。」と逃げ腰になっていた。そこで私は県議会最終日、町出身の代議士米沢与三次、前県議野島茄三郎氏にも同行してもらい、県庁へ乗込んだ。ところが両氏とも知事室へひっぱりこまれて口説かれた結果「三日市に本校、入善に分校を設ける」という妥協案を呑もうとしているので、私は両氏を突き放して知事室へ怒鳴り込み、涙にむせびながら知事を説得した。

どんでん返しで入善町への設置が決定

…幸い当時の県議会は私の属していた立憲政友会が強かったので、揉みに揉んだ末、最終日の 12 時ぎりぎりになってようやくどんでん返しで、入善町に県立農学校を設置することに決まったわけです。九分九厘まで決定的だったものを、私の頑張りと立憲政友会の多数でひっくり返したということになる。お蔭で誘致功労者として、農学校の校庭の北隅に私の銅像を建ててもらいました。

---

[2] 『栞　富山県を生んだ米沢紋三郎翁と元健翁父子の回想録』（田中忠一著／編・発行、昭和 58 年）

参考文献

※『書名』（著・編者、発行年、発行者）の順に記載

『入善町誌』（入善町誌編纂委員会編、昭和 42 年、入善町役場）
『入善町史　通史編』（入善町史編さん室、平成２年、入善町）
『栞　富山県を生んだ米沢紋三郎翁と元健翁父子の回想録』（田中忠一著／編・発行、昭和 58 年）
『入善町ところどころ』（昭和 59 年、森清松編・発行））
『今昔』（長崎正間、昭和 34 年、北日本新聞社）